

# 言葉のコラージュを用いた日記制作における Arts-Based Research

- 他者との関わりと自己理解の観点から -

田口 遥香

(学籍番号：21PE1118, 指導教員：手塚千尋准教授)

## 目的

本研究は、自分の思考の特性と、自分にとって他者との関わりはどのようなものなのか、の2点を明らかにすることを目的とした、Arts-Based Research(以下、ABR)による制作研究である。岡崎(2008)によると、自身に重ね合わせる部分がある他者の言葉のコラージュでは、最終的にその人自身を映し出すものとなることが分かった。しかし、執筆者の背景が分からないような、大衆化された他者の言葉のコラージュでも自分の考えを表現できるか否かについては示されていないため、他者の言葉のコラージュによって自分の言葉を明らかにすることをコンセプトとして、雑誌を題材とした日記制作を行った。

## 方法

本研究は、ABR で取り組む。ABR とは、芸術を創造的な探究の方法(実践)として捉え、意味や価値の創出に用いていこうとする研究の考え方を示す概念である(笠原, 2019)。

制作は、①雑誌を題材とした30日分の日記制作、②制作過程の考えや作品の補完としての制作記録の記述、③展覧会での日記作品の展示、④展覧会の来場者の感想を題材とした作品制作、という手順で行った。

## 制作

### (1) 日記制作

2024年10月～11月中旬にかけて、この期間の内、30日分の日記制作を行った。ジャンル別になっていて扱いやすいことから、雑誌の言葉を題材としてコラージュした日記を制作した。(Figure1, 2)



Figure1 10月1日

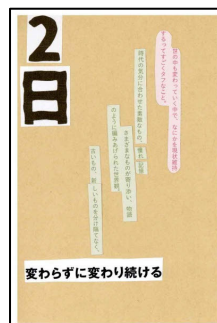


Figure2 10月2日

### (2)制作記録

制作中に感じたことや考えたことを紙媒体に記録した。制作記録は、制作における自分のこだわりや制作の基盤となる考えを記した。本研究における制作記録は、作品を補完するもの、作品のテーマや背景にある考えを記録するものとして位置付ける。

### (2) 展覧会

2024年11月25日(月)～12月1日(日)の7日間デザインフェスタギャラリー原宿 EAST204にて、制作した日記の展覧会を行った。展示したのは、①雑誌を題材とした30日分の日記作品、②制作記録、③展覧会中に制作した作品、の3点である。③については、展覧会中に、参加者に感想用紙に感想を書いてもらい、その感想の中からキーワードを取り出し、来場者の感想を題材として新たに作品制作を行ったものである(Figure3)

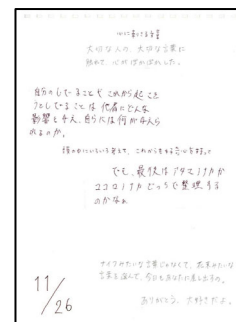


Figure3 11月26日

ここでは、展覧会を制作成果の展示としてではなく、制作の過程として位置づけている。

### (4)制作を通しての考察

雑誌を題材として制作した作品(以下、雑誌作品)と、展覧会中の来場者の感想を題材として制作した作品(以下、感想作品)の制作過程や作品を振り返り、作品としての在り方や制作中に感じることに違いがあると気付いた。

雑誌作品は、自分の中にある抽象的な考えや感覚に対して、雑誌の言葉を当てはめることで、言葉として具現化され、表出される感覚がある。

一方感想作品は、他者の言葉と自分の言葉が別物として扱われる感覚がある。言葉そのものというよりは、感想を書ってくれた人の背景や考え方に意識が向くことが多かった。

## 分析

作品、制作日記で用いられた言葉や記述の意味を捉え、制作時における感覚の違いを明らかにすることを目的に、KH Coderを用いた量的分析とオートエスノグラフィーによる質的分析による混合研究法で分析する。

### (1) 量的分析

KH Coderという計量テキスト分析ツールを用いて雑誌作品、感想作品それぞれの抽出語の頻出度と、抽出語同士の関わりについて分析した。

頻出度については、雑誌作品、感想作品ともに「自分」という抽出語が最も多く出てくることが分かった。さらに、頻出順は異なるものの、どちらも上位5位までの抽出語が、「自分、人、心、言葉、思う」の5つの抽出語で構成されている点も共通点として挙げられる。

また、共起ネットワークで抽出語同士のつながりを比べてみると、雑誌作品では「自分、人、心、言葉、思う」の5つの抽出語は全て同じグループに入っていたのに対し、感想作品では「自分、心、言葉」と「人、思う」でグループが分かれている。(Figure4, 5)

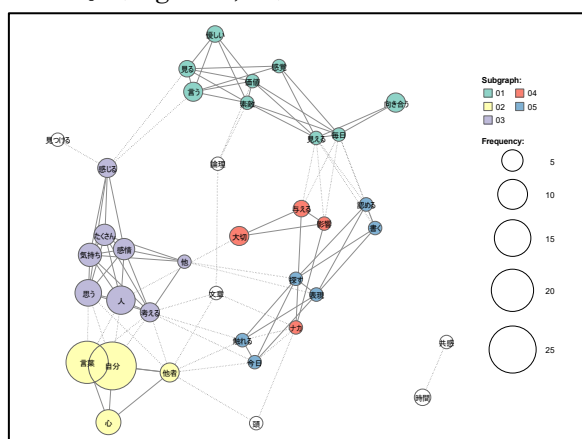


Figure4 雑誌作品の共起ネットワーク

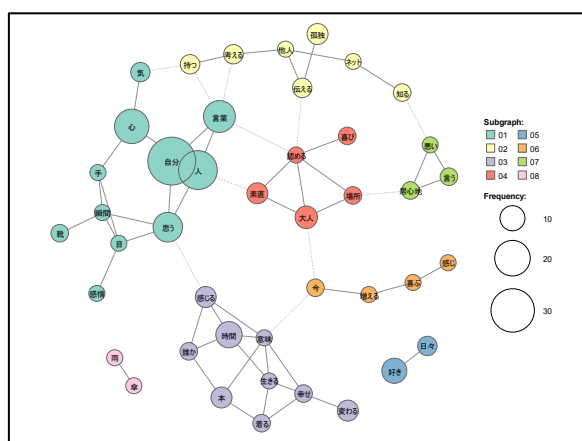


Figure5 感想作品の共起ネットワーク

### (2) 質的分析

オートエスノグラフィー(autoethnography)は、社会科学において、研究者自ら有する

(ownculture)を理解することを目的とした記述的研究の総称である。中でも本研究では、土元(2022)による分類の内、研究者が持つ主観的な感覚や感情を軸に、その経験を文学的な工夫によって表現・理解していく、自叙伝的オートエスノグラフィーの方法論に基づき分析を行う。

量的分析で頻出度が最も高かった「自分」という言葉が作品内でどのような文脈で使われているのかを分析した結果、「自分の居場所」に関する記述が多いことが明らかになった。

さらに、「自分の居場所」について制作記録を基に自分の思考の特性について分析した結果、自分の内面を表に出すことに対して慎重であること、私にとって「自分の居場所」は物事を考える時や他者と関係を築く際の軸の1つになっているということが明らかになった。

## 考察

分析の結果を踏まえ、雑誌作品と感想作品の感覚の違いとして、題材とする言葉の執筆者と考えや経験を共有しているか否かが関係していると考ええる。本研究では、雑誌作品の方が自分の考えの表出に適しているということから、私にとっては考えや経験を共有していない他者の言葉のコラージュの方が自分の言葉となり得るといえる。この結果は先行研究とは異なることから、他者の言葉のコラージュによって自分の言葉を創り出すという行為において、題材とする他者の言葉の執筆者と経験や考えを共有しているか否かがもたらす影響は、人によって感じ方が異なると考ええる。

また、自分の思考の特性と他者との関わりについては、「自分の居場所」を軸に他者との関係を築き、自分の考えを形成するために、主体的に他者の言葉を取捨選択し、抽象的な自分の考えを言葉として表出していくという特性が挙げられる。

## 主要引用文献

岡崎倫子(2008), 他人の言葉で「私」を語る--太宰治「盲人独笑」のコラージュとその告白, 近代文学.研究と資料.第二次 2, 148-163  
笠原広一(2019), Arts-Based Research による美術教育研究の可能性について 美術科教育学会誌,40(0),113-128